GYROS

現代を考える　ジャイロス

諏訪春雄 責任編集

#5

特集

沖縄の苦悩

沖縄の忍従と犠牲の歴史を私たち日本人はどこまで知っているのか

桜井徳太郎
「オボツカグラ、ニライカナイと海にかこまれて」

外間守善
「私の沖縄と沖縄学」

大城立裕＋嶋津与志＋林 博史＋長谷川均
遠藤庄治＋山下欣一＋福 寛美＋渡邊欣雄
福田 晃＋尚 弘子＋渡辺 誠＋崔吉城＋諏訪春雄

新書20冊以上の情報量

連載

紀田順一郎［名作再読］
横尾忠則［悠游漫歩］
河野裕子［こころとことば］
三田誠広［ともに生きる］
篠沢秀夫［立腹帖21］
大城立裕［モノレールのはしる街で］

サンゴ礁は生き残れるか

サンゴ礁がなければ、沖縄観光の持続的な発展はありえない。ところが沖縄のサンゴ礁は今、とても危ない状況にある。豊かなサンゴ礁生態系は海水温の上昇で壊れ、オニヒトデに食われたサンゴは死に、美しい景観は大規模な公共工事でつぎつぎに失われてゆく。

長谷川　均

【はせがわ・ひとし】
一九五三年、新潟県生まれ。法政大学大学院博士課程修了、国士舘大学文学部地理・環境専攻教授。専門は自然地理学。著書に「熱い自然」、「熱い心の島」（共編著）、「リモートセンシングデータ解析の基礎」などがある。琉球列島で二十年以上にわたりサンゴ礁、サンゴ礁の環境保全の調査と研究をおこなっている。この間、日本自然保護協会、WWFジャパンの白保サンゴ礁や泡瀬干潟の調査などに参加。

いまの沖縄を語るキャッチコピーは「スローな時間、島時間」、「スローフーズ」に「癒しの空間」。沖縄へ行けば時間がゆっくり流れ、のんびりと健康的でやさしい人たちは、身体にやさしい旨いものを食って長生きしているとでも言いたげな言葉が雑誌の表紙に並ぶ。そんなやさしい人たちの住む沖縄を取り巻く自然は、この百年でずいぶん変わってしまった。おそらく、これからの数十年で想像もつかない変わり方をするかもしれない。公共工事に依存する社会的な構造や破壊に費やされるエネルギー、海に垂れ流される汚水をみれば、ゆっくりと時間がうごく自然たっぷりの島々などというフレーズは空々しく耳障りだ。

ひとむかし前、離島の立てカンバンに見た「環境破壊は開発の原動力」という勇ましい標語が、「平和で安らぎのある県」とか「グリーンツーリズムで地域に活力を!」を目指すこんにちの沖縄にとっても、おそらくはまだまだ本音なのではないだろうか。

サンゴとサンゴ礁の違い

「サンゴ礁は生き残れるか」という話の前に、サンゴやサンゴ礁のことを少しだけ記しておきたい。

ふつう、サンゴといえば宝飾品の「本サンゴ」(いわゆる宝石サンゴ)を連想するだろう。色鮮やかな本サンゴは、水深一〇〇〜三〇〇メートルの海底に着生し、場所によっては水深一〇〇〇〜一五〇〇メートルの海底から採取されるものもある。深い海に棲み、硬い骨格をゆっくり作りながら成長する動物である。その緻密な骨格が宝飾品に生まれ変わる。本サンゴは真珠とともに日本を代表する宝石である。古来、エーゲ海やアドリア海がその産地であったが、ここではほとんど枯渇しており日本近海や西南太平洋が現在の最大の産地である。

いっぽうサンゴ礁を造るサンゴは、造礁サンゴとよばれる。宝石サンゴに対して岩石サンゴなどという場合もある。本稿で語るサンゴ礁の話に登場するサンゴは、この造礁サンゴのことで、エダサンゴやテーブルサンゴなどとよばれて、雑誌のグラビアを飾るのもこのサンゴたちだ。

造礁サンゴは、共生する褐虫藻という藻類が光合成で作る栄養分を取り込んで骨格を作るため、光の届く浅い海に生息する。造礁サンゴの成長ははやく、年間一センチから数センチである。この骨格や、石灰藻、有孔虫などサンゴ礁に棲み、石灰分を分泌する生物の遺骸が固まって形成される海の中の台地が、サンゴ礁という地形である。

造礁サンゴは、一定の海水温や塩分濃度の海域でしか生きていけない。海水温が高くなりすぎても、低すぎても死んでしまう。淡水や濁水が大量に流れ込むのもまずい。適度に暖かく透明

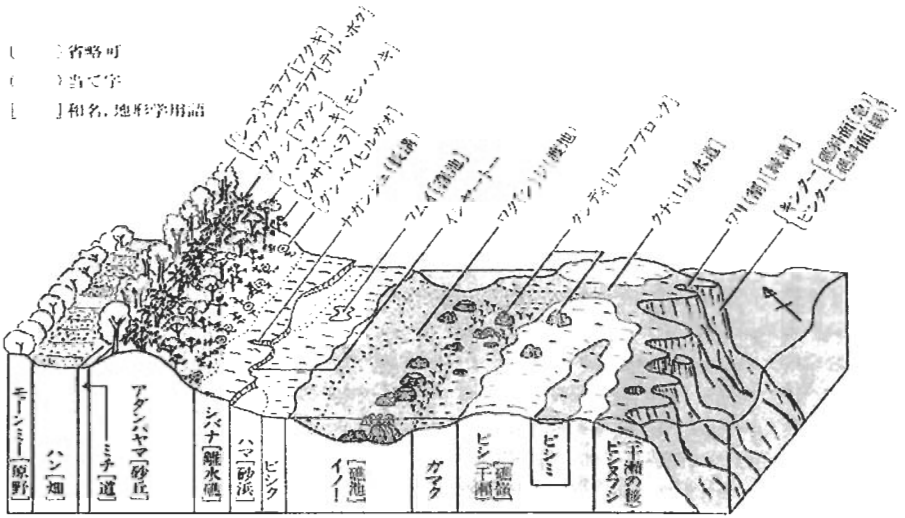

図1　サンゴ礁の地形構成と名称
渡久地健による

で光あふれる浅い海にだけ造礁サンゴは生き、サンゴ礁ができてゆく。サンゴ礁は強固な地形だけれど、いちばん上に生きるサンゴは簡単に死んでしまうこともあるから、壊れやすいガラスの城という一面も持っている。

沖縄のサンゴ礁はいつからできたか

約一八〇万年前から現在までは、第四紀という最新の地質時代である。人類が発展し、私たちの周りの景観が作られた時代だ。第四紀の後半、気候は一〇万年ほどの周期で氷河期と間氷期を繰り返し、海面の高さは一二〇～一三〇メートルの幅をもって変動していた。陸上に氷河が発達する氷河期に海面は下がり、氷河が融ける間氷期になると海面は上昇した。沖縄などで見られる現在のサンゴ礁は、一万二千年前以降の海面の上方に伴って、水深五〇メートル付近から光と海面を

写真1
空から見た石垣島白保サンゴ礁
南方から見おろしている。サンゴ礁の幅は最大で約1km、水深は2～3mである。白波がたつ部分がサンゴ礁の縁にあたり、それより沖は急に深くなる。サンゴ礁の中に白く見える部分がワタンジで、干潮時にはここを通ってサンゴ礁の縁まで歩き、道すがらおかずを手に入れる。中央の海に接する陸上部分が新空港予定地にあたる。

追いかけるように上へ上へと成長してできたものである。一万年という数字は、四六億年の地球の歴史から見るとほんの一、二秒前のようなごく最近のできごとだ。

サンゴ礁はなぜ守らなければならないのか

サンゴ礁はその美しさだけでも守る価値がある。しかし、よく言われるように美しさはサンゴ礁の価値の一部にしかすぎない。例えば、沖縄では台風の暴浪は、海岸線から数百メートル先のサンゴ礁の端で砕ける。世界では、百カ国以上の国でサンゴ礁が見られるが、それらの国々ではサンゴ礁が海岸を守る防波堤の役割を担っている。

サンゴ礁の魚介に頼って生きる人は、開発途上国を中心に膨大な数にのぼる。世界中のサンゴ礁で捕れる魚は、食用に供される量の約十分の一にあたるといわれている。また、幼い時期サンゴ礁で守られて成長し、外洋へ向かう魚も多い。サンゴ礁の景観を利用して成り立つ観光もある。こんにち、リゾート地といわれる島々にサンゴ礁が無ければ、ただ暑いだけの離島に足を向ける人など、そうはいないだろう。観光資源として利用できる場所、景観美によって人々に安らぎを与えてくれる場所もサンゴ礁だ。

サンゴ礁は、全海洋生物のうち二五%の生息地と推定されている。もしサンゴ礁が無くなれば、生態系にとって取り返しのつかないことになるだろう。サンゴ礁は全海洋面積の〇・三%程度を占めるにすぎないが、守る意義はその美しさだけにあるのではない(引用した数値は主に、レスター・R・ブラウン、『地球白書一九九三―九四』ダイヤモンド社による)。

長谷川 均

浜から歩いてサンゴの海へ

日本のサンゴ礁は「裾礁（きょしょう）」というタイプのサンゴ礁だ。裾礁の形は麦ワラ帽子にたとえると判りやすい。頭の入る出っぱりを島にたとえれば、そこをとり囲むツバの部分が水深の浅い裾礁というサンゴ礁になる（**写真1**）。

写真2 ワタンジを歩く
干潮の時サンゴ礁を歩くとこのような景観にであう。

図1は、この裾礁をとてもうまく説明している。砂浜から沖合のリーフまでは、最大でもせいぜい一キロメートル。その間の海はイノー（礁池（しょうち））とよばれる。イノーは水深二〜三メートル、最大でも五メートル程度の深さしかない。潮が引けばイノーの中のワタンジという高まりを通って、沖合の干瀬（ピシあるいはピー）まで行き来することができる（**写真2**）。

その先の海は三〇〜四〇メートルと急に深くなってしまうが、少なくても沖合五〇〇メートルから一キロメートルくらいまでは干潮の時であれば人が歩ける。それが沖縄のサンゴ礁である。サンゴ礁の凹みや大きな岩に、固有の名前を付けて識別している例も多い。このことからわかるように、人々との係わりが深いのが沖縄のサンゴ礁の特徴といえるだろう。

オーストラリアのグレートバリアリーフ（堡礁タイプのサンゴ礁）に行って、「サンゴ礁で泳いでみたい」と思っても何時間か船に乗り、百キロメートルほど沖合に連れて行かれてから「さあ、泳いでください」ということになる。いちばん近いところでも陸から十数キロ、遠いところでは二〇〇キロ以上も沖合にサンゴ礁がある。このような場所では、昔から人々とサンゴ礁に深い付き合いがあったということは考えにくい。沖縄では、夕飯のおかずを自由に取って来たりすることができるという意味も含めて、人々の暮らしの中にサンゴ礁の海が密接に関わってきた。これが、沖縄のサンゴ礁とグレートバリアリーフの決定的な違いである。南太平洋の、環礁の島々との比較も面白い。ここではサンゴ礁と人々との関わりが沖縄とはまた別の意味で深いのだが、これはまた別の話としたい。

沖縄のサンゴ礁は、安全で浅くてアプローチしやすい海が広がっており、

**サンゴ礁の凹みや大きな岩に
固有の名前を付けて識別している例も多い
人々との係わりが深いのが
沖縄のサンゴ礁の特徴といえるだろう**

比較的自由に海を動き回ることができる。逆に言えば、沖縄ではサンゴ礁の海へ重機を簡単に入れることもできるから、開発しやすい海といえるかもしれない。沖縄本島中南部では、このようなサンゴ礁がそれこそあっという間に埋め立てられてしまったのだ。

健全なサンゴ礁とは何か

健全なサンゴ礁とはどのようなものだろう。泳ぎながら海底をながめたとき、腹の下の見渡す範囲すべてが生きたサンゴで埋め尽くされているというのが、必ずしも健全なサンゴ礁ではないかもしれない。もっとも日本ではそんな所はあまり無い。

生きたサンゴが岩盤の半分ほどを覆っており、死んだサンゴもいる。半日くらい泳いでいればサンゴを食うオニヒトデも何匹か見る、というのが普通のサンゴ礁だろう。サンゴは生き物だから、ある時期に生きたサンゴの被覆度が低くても、環境さえ悪くならなければ何年か後に劇的に良くなっていたりすることがある。もちろんその逆のケースもある。だから、一時だけの調査で「ここはあまりサンゴがいないから開発してもだいじょうぶ」などという判断ができないのが、生き物が作るサンゴ礁の海なのだ。

サンゴの死 オニヒトデと白化

一九七〇年代から八十年代の前半にかけて、沖縄のサンゴ礁は一大危機を迎えた。オニヒトデというサンゴの天敵によって、造礁サンゴはごく薄い表面の部分を食い荒らされてしまったのだ。オニヒトデはサンゴに覆い被さり、口から出した胃を反転させてサンゴに密着させ、表面の軟体部分を食い尽くす。残されるのは白い骨格だけだ。骨格にはすぐに藻が付着する。やがては波で砕かれて、海底には無惨なガレ場

が広がってゆく。オニヒトデの食害で、沖縄のサンゴ礁では多くの場所で造礁サンゴが死んでしまった。

それから約二〇年、ようやく景観の戻ったサンゴ礁を、今度は異常な高海水温が襲う。一九九八年夏のことであった。南半球では夏にあたる九七年から九八年の冬、北半球では九八年の夏の海水温は世界的に高くなった。この年の夏、私はちょうど石垣島で調査をしていた。いつもの年にくらべ、高い海水温が梅雨明けからサンゴ礁を温め、風呂のように温くなった四〇度ちかい温度の海につかりながら白く死んでゆくサンゴを見ていた。

造礁サンゴは生息環境が悪くなると、苦しさのあまり共生している藻類を吐きだし、そのせいで白い骨格が素通しになって白くなってしまう。これがサンゴの白化現象だ。白化したサンゴは、その後つぎつぎに死んでゆく。色鮮やかだったサンゴ礁の浅海底は、一面のガレ場と化した。とても悲惨な状況だった。

世界中のサンゴ礁で造礁サンゴの白化が起こってしまったのだ。沖縄では、サンゴの海を泳いでいると、全面見渡す限りのサンゴが真っ白になり、何週間か後には藻が付いてなんとも汚らしい有様だった。サンゴが一面に白化したばかりの頃、電灯潜り漁にでた海人（うみんちゅう）（漁師）は「あんなにきれいな夜の海はみたことないさぁ」などと言ってはいたけれど、そのうち日を追って顔は曇っていった。一九九八年はエルニーニョの年で、南米の沖合で高温域が発生し、世界の各地に高海水温域（ホットスポット）が出現した。それらの海域では、サンゴが白くなって死んでしまった。浅瀬に生息し、高温に強いハマサンゴなどもすべて白くなってしまったのだ。造礁サンゴが死ぬと、そこでみられる多様な生態系もくずれてゆく。いちばん判りやすいの

造礁サンゴは生息環境が悪くなると
苦しさのあまり
共生している藻類を吐きだし
そのせいで白い骨格が素通しになって
白くなってしまう
これがサンゴの白化現象だ

写真3
サンゴ礁の海に広がる赤土
写真の右側にある河口からサンゴ礁の海へ赤土混じりの河川水が広がってゆく。

は、魚がいなくなるということだ。漁師にとっては死活問題になる。

沖縄では、その後も夏が来るたびに毎年のように白化が観察されている。しかし、九八年の影響からじょじょに回復しつつあるというのが大方の見方であった。ところが、ここに来てまたオニヒトデだ。沖縄中のいたるところで、オニヒトデが増え始めた。夜行性のオニヒトデを、昼間五〇メートル四方に一匹以上見たら要注意といわれるが、その段階を越えてしまった場所も多い。

オニヒトデの発生を、沿岸域の汚濁と関連付ける見方をする人もいる。それでなくとも、沖縄の海は有名な赤土汚染で大きなダメージを受け続けている。そのあたりにそろそろ話をうつすことにしよう。

赤土の流れが止まらない

強い雨が降ると沖縄のサンゴ礁は河口から次第に赤く染まってゆく（**写真3**）。陸から流れ出した赤い色をした酸性土壌による赤土流出という現象である。一九五〇年代になって、干ばつに強く、酸性土壌を好み排水良好な土地に適したパイナップルが傾斜地の急ごしらえの畑で栽培されはじめた。畑の多くは個人が造成したものだった。流れ出す土砂の多さに「島が溶ける」と形容した人もいたという。

パイナップル栽培はその後さまざまな事情で廃れたため、パイン畑からの流出は激減した。しかし、一九七二年の本土復帰後にはじまった土地改良事業や沖縄振興開発事業という公共工事が、新しい赤土流出源をうみだしていった。沖縄振興開発事業では、「本土並み」、「本土との格差是正」というスローガンで、大規模な工事を短期間に集中的に実施し、そして赤土が流出していった。

吉嶺全二という人がいた。三〇年以

石垣島へ飛行機で訪れると
緑豊かな美しい島という印象を受けるに違いない
しかし、目をこらして見ると
島の台地や平地の部分は
すべて人の手が入っていることがわかる

長谷川 均

上にわたり沖縄の海を見続け撮り続けた人だった（『海は泣いている』高文研、一九九一）。吉嶺さんは、この点を問い続け環境破壊をもたらしたのは公共工事だとして、住民訴訟をおこしていった。海への思いが、新石垣空港建設反対へと動き、環境破壊を続ける公共工事の責任を問う住民訴訟へとつながった。彼が海で亡くなったとき、灰谷健次郎は新聞に「人間の仕事」として吉嶺さんの人生から多くのことを学んだと書き、写真週刊誌は「開発の罪」を撮り続けた「吉嶺全二」沖縄の海に死す、と彼が死の直前に撮ったと思われる写真を載せた（真喜志好一、http://www.rik.ne.jp/kangyo/tinjyutu5.htm）。

公共工事で出た赤土で、サンゴや魚は住みかを追われることとなった。沖縄本島のある漁協などは、赤土で汚染され漁場としての機能を失った海に、米軍基地を誘致しようとしたこともある。そこまで深刻な状況に陥っていたのだ。

一九九五年に沖縄県は赤土等防止条例を施行し、大規模な開発工事には規制をかけるようにした。その結果、工事現場からの赤土の垂れ流しは大幅に減ったといわれている。しかし、土地改良事業でできた優良農地といわれるサトウキビ畑からは、いまも赤い土が流れ続けている。

赤土汚染は、沖縄本島北部や久米島、石垣島など広い範囲で問題になった。本土復帰以降の三〇年間で、開発によって陸域の景観が変わりそれに伴ってサンゴ礁の海も変わっていった。石垣島でこのようすを見ることにしたい。

どこで死にどこで生きる

現在の沖縄の中で最も広い範囲にわたって、比較的健全なサンゴ礁が見られるのは石垣島だ。レジャーダイビン

グのすばらしいポイントは、沖縄本島周辺の島々や石垣島の周辺にもたくさんある。外洋にある離礁には、素晴らしいサンゴが生きているが、沖縄の典型的な裾礁タイプのサンゴ礁、すなわち浜から歩いて行けるサンゴ礁（図1）に比較的健全な環境が残っているのは石垣島の周辺が多いといってよいだろう。しかし、ここでも安心できる状況とはほど遠い。サンゴ礁の多様な生態系は、どのような原因で壊されていくのだろう。

石垣島へ飛行機で訪れると、緑豊かな美しい島という印象を受けるに違いない。しかし、目をこらして見ると、島の台地や平地の部分はすべて人の手が入っていることがわかる。北から降りるルートをとると、飛行機の下には整然としたサトウキビ畑が続く。

前述の吉嶺さんが言いだして、八九年から私たちはWWFジャパンという自然保護団体とともに、五年ごとに石垣島の全域で生きているサンゴの分布を調査することにした。石垣島周辺の着床可能な岩盤に占める、生きたサンゴの割合を調べ、ここからサンゴ礁の健全度を推定しようというわけだ。この調査の結果、集落や広大な農地が広がる前面の海には、あまり生きたサンゴがいないらしいことがわかり始めてきた。

陸が変われば海も変わる

私と共同研究者は、一九二〇年頃と一九九〇年代（大正期と昭和・平成期）の土地利用の変化図を沖縄県全域で作成した。海の変化を知るためには、まず陸の変化を知りたいと思ったからだ。一〇〇枚程のデジタル地図ができ、量の多さに整理が追いつかない。これらの図をみると、いろいろなことに気が付くが沖縄本島の特に中南部では、戦争の影響も大きく七〇～八〇年間で森林や原野であったの部分の多くが畑や基地などに置きかわっていた。海岸部分の埋立もハンパではない。

この仕事とは別に、本土復帰以降三〇年間のサンゴ礁の浅海域の変化を知るために、五時期の航空写真で石垣島の白保サンゴ礁を比較してみた。本土に復帰し土地改良事業が始まって数年経った時期から、海岸に近い部分の海草帯がだんだんと増えていることに気が付いた。海草の成長は造礁サンゴの成長より速い。従って、海草は浅い部分の造礁サンゴを覆ってしまい、サンゴに光が届かなくなり、造礁サンゴは成長をとめてしまう。したがって、サンゴ礁の浅い海に海草が繁茂することは、造礁サンゴにとって脅威になる。海草によって造礁サンゴが駆逐されるという大きな影響が起こるのだ。

いろいろ調べてみると、海草帯の増加は流れ込む赤土のせいらしいことがわかってきた。海草帯には大量の赤土がたまっていた。この赤土と赤土に混

ざった富栄養物質が海草の繁茂を促しているように思われる。

白保サンゴ礁の流域には、数十の畜舎があるが、糞尿がほとんど未処理のまま川に流されているようだ。現地で「便乗排水」という言葉を教えてもらった。畜舎のコンクリートの床面が緩やかに川に向かって傾斜している。雨が降ると雨水によって川に排水され、雨水に便乗して畜舎のゆかを洗う。この便乗排水がそのまま川に垂れ流しされる。赤土にはさまざまな栄養分がとけ込み、それが赤土と一緒に海に流れ込み、赤土とともに海草帯にトラップされ、海草帯が広がる。

どれくらいの栄養分が流れ出るのか測定できない。複雑な現象の空間的な相関というのは分析的な因果論まで進めることができない。海域と陸域の分布図はあくまで実証的な証拠にすぎない。それを定量化しろといわれてもできない。しかし、海域での陸水のたち振る舞いを考えると、このストーリーは当たっていると思う。

赤土は直接造礁サンゴを覆って死なせることも多い。しかし、このように間接的にジワジワと悪影響を及ぼしてもいるのだ。

目眩まし

この春のこと、沖縄行きの飛行機で機内誌を見ていると、シマおこしの担い手でありエコツーリズムで島の自立をめざしている方が特集記事で出ている。この方は、島の内発的な発展に強いこだわりを持っている人として知られており、西表島で島の自然を守りながら経済の自立をめざす活動をしている。東京の私企業と行政が推し進めてきた、西表リゾート開発の差止訴訟原告団呼びかけ人でもある。

「自然とともに暮らす島の人々と出逢った」というこの記事は、「島の自然と文化を守る活動を続けてきた」とこの方を紹介する。ところが乗り換えた系列離島便の、機内誌のトップが見開きでこのリゾートホテルの開業大広告だ。節操のない、配慮を欠いた無神経さに、ご本人はさぞ怒っているのではないかと思った。面識のない私の腹も治まらない。たくさんの客をよびたいホテルのキャッチコピーが「ありのままの自然、ありのままの時間」だという。

マスツーリズムで食っている航空会社や観光業者、行政が、うまい具合にエコという言葉を使って私たちを目眩ましにかけている例は、日本のそこここにあるような気がする。「だまされまいぞ」と、広告の美しい西表島の写真を見るのであった。

「エコツーリズム」という言葉は、日本中で使う側のさまざまな解釈や都合で利用される。エコという文字は、企業や行政にとっては黄金の花に見えるのだ。

サンゴ礁の巨大な工事

沖縄経済を支えてきたのは、基地、観光、公共事業の「3K」といわれる。冒頭で書いた、「公共工事に依存する社会的な構造や破壊に費やされるエネルギー」の象徴的な例が三つある。米軍普天間基地の名護市辺野古地区への移転問題、沖縄市の泡瀬干潟埋立開発問題、新石垣空港建設問題である。いずれも今どきのセンスでは考えがたい大規模な自然破壊を伴う公共工事である。客観的に見れば、これらの開発を止めさせようとする側の論理の正しさだけが際だっていると思うのだけど、現地の開発推進派はいたって本気で真剣だ。しかし、これらの騒動は、遠い南の島の出来事で、本土ではほとんど報道されることはない。

米軍の普天間飛行場代替施設建設は、普天間早期返還に向けて、辺野古で大規模な海上基地を建設する案だ。

マスツーリズムで食っている
航空会社や観光業者、行政が
うまい具合にエコという言葉を使って
私たちを目眩ましにかけている例は
日本のそこここにあるような気がする

この問題は、他の二つにくらべれば本土のマスコミで取り上げられることも多い。海上基地建設は、住民や市民団体の反対が強いし、自然保護団体は環境影響評価（アセスメント）方法書の不備を指摘している。このような状況で強引に建設を始めるのは難しいだろう。また、最近の沖縄での世論調査をみると、おそらく大多数の県民は現在進められている辺野古沖への代替施設建設に賛成しておらず、ジュゴンが棲むサンゴ礁をつぶす案を推し進める県の方針転換を期待している。

旧コザ市（現沖縄市）の東方にある泡瀬干潟を埋めたて「東部海浜埋立計画」として、巨大ホテルや観光施設、住宅地やをつくるという計画が進行している。大規模なリゾート施設を造ってペイするのかと、計画を知るだれもが心配するところだが、推進派の市民は将来の街づくりに夢を広げ、反対派の市民は頓挫するのが明らかな計画

のために貴重な干潟をつぶすなと訴える。

工事が始まってから、埋立予定地で新種・希少種の海草類や貝類が続々と発見され、工事は中断を余儀なくされた。不十分な環境アセスメントで見切り発車した結果であろう。ところが、沖縄市議会は、中城湾港泡瀬地区埋め立て事業の是非をめぐる住民投票条例案を反対多数で否決し、着々と計画を推進しようとしている。

二〇年以上も前からもめている新石垣空港建設問題は、新予定地を決めた県が計画を推し進めるなか、新空港建設に伴う自然破壊は深刻な問題になる可能性がある。これに関しては次に項を改めて述べてみたい。

どうしても造りたいのは誰だ

一九七九年、沖縄県は新石垣空港建設位置を白保沖のサンゴ礁に決めたが、貴重なサンゴ礁生態系がみられる、沖縄でも数少ない海であったため、世界的な支援を受けた反対運動が起きた。その結果、建設位置は二転三転した。さまざまな経緯ののち、二〇〇〇年に白保サンゴ礁に接する石灰岩台地「カラ岳陸上」に建設位置が決定された。一五〇〇メートルの現在の空港を二〇〇〇メートルに拡張する案は、さまざまな理由を付けられて最初から候補にすらあげられなかった。

この二十数年、石垣島では「新空港ができなければ島は沈む」といわんばかりの世論形成がおこなわれ、島の外からどのように見られているかが解らなくなっているのではないか、と思うほどである。なりゆきで「新空港賛成よ」と言っている多くの人たちも「新しく造ること以外に方法はないのか」という思いで、少しづつ口に出し始めているかのようである。ただ、「背に腹は代えられないと、安易に巨大プロ

生活という名の下に
自然を破壊させていく行為は
いったいいつまで続くのだろう

長谷川均

ジェクトや公共事業に頼るのではなく…」などということが言える雰囲気ではない。新空港を造ることによって、経済的なメリットを受けるのは誰なのか、環境が悪化することによる不利益がどこにもたらされるのか。それが将来、どのような悪影響を何に与えるのか。具体的に示されなければならない。

島中のそこここに掲げられた「八重山郡民の総意」「悲願の新空港」「民意で決まった建設位置」などというスローガンで、いつまで人々を振り回すつもりなのか。少なくとも今日、多額の税金を使って空港を造ることで、貴重で多様な自然を壊してしまうことの正当性と必然性を、建設費を負担する都市居住者に客観的な資料で示さなければならないだろう。示して理解を得るのは難しいけれど、どうしても新しい空港が必要ならその努力をせずして造るわけにはいかない。

泡瀬にしろ、新石垣空港にしろ行政側にとって幸いなのは、巨大プロジェクトが進行していることを、多くの国民が知らないということだ。公共事業見直しを唱える本土のマスコミに取り上げられることのありませんように、後戻りできない状況にまで話が速く進みますようにと願っている人は多いのではないか。

「沖縄県だけに自然保護を押し付けるのは、観光でしか行ったことのない人のエゴです」。「観光ですてきな思い出がつくれるのは、地元の人たちの絶え間ない努力のおかげです。その人たちのためにも、生活があり、新空港が必要なのです」。数年前、石垣島出身だという大学生の投書が全国紙に載ったことがある。その人たちの子や孫のために「新石垣空港が必要か、必要ならどこに造るべきかをきちんと考えよう」というのは、よそ者の余計なお節介と映っているのだろう。

島の自然や自然史に対する教育の不足が、若い人にこのような発言をさせてしまうのではないか。よそ者が島のためにできることのヒントも、このあたりにあるような気がする。

生活という名の下に、自然を破壊させていく行為はいったいいつまで続くのだろう。これまでは自然を食い潰しながら島の経済が発展してきたけれど、それが南の島で人が行き続けていくことに貢献する方法なのだろうか。

「少し考え方を変えれば…そんなこと、言われなくてもわかっています。でもそんなことを考える余地は、私たちには無いのです。公共事業で食っているのですから。その構造自体を替える気も少しはありますが、あと一歩を踏み出す勇気がないのです。選挙も控えておりますし…」私がこっそり聞いたある人のつぶやきを最後に記しておきましょう。この部分だけは創作ですけれど。